

# 笑いと研究の類似性

## The Similarity between Comedy and Research

**Abstract:** I describe the similarity between comedy and research in my academic research life.

私は、大阪出身ということもあり、お笑い好きである。お笑い番組を観ることはもちろん、自らが積極的に働きかけて笑わせようとするこゝもしばしばである。こんな気質になったのは、やはり環境による要因が大きいのではないかと思う。というのも、私の両親は大阪出身ではなく、父は徳島、母は熊本出身で、私のDNAには大阪の笑いの遺伝情報は書き込まれていない。しかしながら、小学校に入学した私は河内弁（大阪東部の方言）を覚え、河内弁で笑い話をするようになっていった。そんな私を見て母が、「この子は学校に行くたびに私の知らない言葉を覚えてくる」と少し悲しげな表情を浮かべていたことが思い出される。

関西地方では、笑いの取れるおもしろい人は一目置かれる存在である。とくに、小学生くらいだと勉強ができる子、スポーツができる子以上に、おもしろい子には尊敬の眼差しが向けられる。そんな環境で育った私は、学部では近畿大学の神川忠雄先生のもとで天然物合成を、修士課程では北陸先端大の辻本和雄先生のもとで生物物理を学び、研究のおもしろさを知った。

博士課程では、東京工業大学の遠藤剛先生（現：近畿大学分子工学研究所長）のもとで、活性イソシアナートを用いた高分子合成に取り組んだ。しかし、この課題は私の前に高い壁として立ちはだかった。それまで楽しく研究に取り組むことができたのは先生方が引いて下さったレールの上を走っていたからであり、自らがおもしろい研究に仕上げていくということは非常に難しいことだということに気付かされた。このとき、私は遠藤先生と同時に、鈴木将人先生（現：名古屋工業大学）、富田育義先生（東京工業大学）のご指導も賜った。とくに、富田先生にはお忙しい中、ほぼ毎日

のようにディスカッションにお付き合いいただいた。このディスカッションの中で、富田先生の抜群の笑いのセンスに触れるのと同時に、笑いと研究の類似性について考えるきっかけをいただいた。研究は真理を求めて事実を深く追求することであるが、おもしろい研究というのは、前述の要件に加えて、人が見てウケるかどうかにについて細やかに計算された作品（ネタ）のように感じられたのである。おもしろいと感じる研究というのは、姿が見えない人々に対しても、おもしろいと感じてくれるだろうかという愛情にも似たサービス精神が注ぎ込まれることで達成されているのではないかと思うようになった。3年後、諸先生方のご指導のおかげで何とか博士の学位を取得することができたものの、おもしろい研究を具現化することに答えを出すことができずにいた。

その後、私は博士研究員、民間企業での勤務を経て、京都大学の中條善樹先生のもとで、博士研究員としてハイブリッド材料に関する研究に取り組む機会に恵まれた。がむしゃらという聞こえが良いが、それまで力まかせの研究を行っていた私は、中條先生の「Enjoy Chemistry！」というお言葉に深い感銘を受けた。笑いを取ろうと必死になっている人は決してウケることはない。研究でも、同じことが言えるのではないだろうか。心の底から研究そのものをEnjoyしないとおもしろい研究を具現化することは難しいのではないかと感じるようになった。これまで私を支えて下さった諸先生・諸氏に感謝しつつ、そして、私もいつの日か非常におもしろい研究をなし遂げたいと願いつつ、まずは、すべらない研究を積み重ねて日々の研究生活をEnjoyしていきたいと思う。



岩村 武 Takeru IWAMURA

静岡県立大学環境科学研究所反応化学研究室  
助教、博士（工学）。

大学院の研究室名 / 研究テーマ  
北陸先端科学技術大学院大学辻本和雄研究室/合成リン脂質とバクテリオロドプシンで再構成したリポソームの

プロトンポンプ活性。  
東京工業大学遠藤剛研究室/活性イソシアナートの高反応性を基盤にした新規高分子の合成。  
現在の専門分野は高分子化学・マイクロ波化学  
E-mail: iwamura@u-shizuoka-ken.ac.jp